

近世流派剣術から近代剣道への展開過程（2）

— 一刀流の研究を中心に —

立木幸敏（代表）*、吉田鞆男**、仙土克博†、魚住孝至***、朴周鳳*、長南信之†、宮本光輝†

*国際武道大学、**研究所客員研究員・古流剣術研究会主宰

***放送大学 †古流剣術研究会

【要旨】

先行研究において一刀流剣術で17世紀に行われていた形（組太刀）の実際を当時の古文献に即して解明してきた。

昨年までの研究では小野派一刀流の組太刀の表五十本を中心に論じ、また伊藤一刀斎の頃より稽古されている組太刀「三重」の仕様の中から、「セイガン」の構えから「車を廻し」て、相手の太刀が切り落ちる「切落」の刀法が発達してきたことを論じた。

本研究では小野家伝書『春風館文庫蔵』の解析において「五点」についての知見が得られたので報告する。

一刀流伝書の「五点」に関する研究

『小野家伝書』（春風館文庫蔵）は小野家初代・忠明から九代・忠政（業雄）までの各代ごとの一刀流関係の伝書とその付属文書、さらに先祖書などを集めたものである。特に四代・忠一（1658～1738）、五代・忠方（1713～1749）は「一刀流本目録」と「割目録」に詳しい解説を付けた文書を残している。しかし三代・忠於（1639～1712）の文章は掲載されていない。

また『津軽家文書』は、小野家三代・忠於から一刀流を伝授された弘前藩（津軽藩）四代藩主・津軽信政（1646～1710）及び息子の五代藩主・信寿（1669～1746）の稽古の覚書を中心とする一群の伝書であるが、その中の「剣術組遣形覚書」には、「表五十本」「三重」「切落（5本）」など、一刀流の組太刀の仕様が詳しく記載されている。これによりほぼ元禄年間に定型化したと考えられる組太刀の仕様が推定できる。

「五点」は、流祖・一刀斎以来の流派の根本の組太刀として小野家では大事にされ、代々がそれへの工夫を行っていた。その実態を知るとともに、今後の研究の材料となるように翻刻を引用・掲載をした。

小野家の二代・忠常の割目録だけでは、実際の技の仕様は窺がえないが、忠一、忠方の解説によって、具体的な技が推定・復元可能になる。小野家では技の伝承は、師弟間で技の伝授が終った時に割目録が授与され、さらに授与する時にどう解説するか、代々の伝書による言い伝えがあった。

本論において、十七世紀末から十八世紀初期と推定される津軽家文書と、一八世紀前半の忠方の解説との一致が確認されたことは、十八世紀前半までの技の仕様がほぼ確認されたことになる。

また「五点」をさまざまに工夫するところから、「表五十本」が成立していたことを一端ではあるが確認できたことは、流祖以来の「五点」は小野家初代・忠明の代からさまざまに工夫されて二十五本に

展開していたこと、さらに二代・忠常以降も工夫をして、それらを整理して五十本にまとめたと考えられる。割目録の「真の五点」「草の五点」「新真の五点（忠常の撰）」の細かな一つ書きはそのことを示している。さらに稽古の組太刀としては「表五十本」となったが、小野家の伝書は二代の忠常のものをそのまま踏襲して、その解説の形で実質的に「表五十本」を解説している。忠方の「表五十本」の何本目に相当するという言い方は、そのことを証している。

五代・忠方の解説により、伝書に従って、実際にどうであったのかは、技を推定・復元することによって確かめられることができる。著者らは「折身」の復元と忠方の割目録にある「草の五点②」の比較検討によって、「折身」は三代・忠於の作、「草の五点②」は四代・忠一か五代・忠方の作と考えている。

空手道障害者大会におけるクラス設定・採点方法

— 第1回世界障害者空手道選手権大会におけるクラス設定・採点方法から考える —

Classification and evaluation system in Karate Championships for persons with disabilities

— From the perspective of the First Karate World Championship for Persons with Disabilities —

松井完太郎、奈藏俊久、日下修次*、三村由紀**、矢崎利加、荒川尊祐

(*全日本空手道連盟、**防衛大学校)

空手道のオリンピック競技化が有力視されている中で、パラリンピック競技化に向けた準備を進めることを目的に調査が始まった。その過程で、2015年10月1日に国際武道大学が主催したシンポジウム「空手道のパラリンピック種目化を見据えて」が実現した。世界空手連盟(WKF)の理事、事務総長、全日本空手道連盟(JKF)の理事、事務局長を迎えたこのシンポジウムにおける議論を中心に報告したもの。障害者による空手道競技はJKFが2005年から全日本障害者空手道競技大会をスタートさせ、WKFは2014年に世界障害者空手選手権大会をスタートさせている。世界選手権では、車椅子利用の部などの大きなカテゴリー設定をしてメダル価値の維持を図りながら、障害による差異は加点方式で公平性が保たれた。シンポジウムで議論がなされた、パラリンピック競技としてのカテゴリー設定、機能テストによるより細かな加点システムの導入可能性、さらには、空手道オリンピック競技ルールの中に障害者の出場可能性を確保する工夫などについて報告する。

柔道における競技情報の即時配信システム構築に関する研究

研究代表者：廣瀬恒平（国際武道大学）

共同研究者：森実由樹（国際武道大学）、石井兼輔（国際武道大学）、
越野忠則（国際武道大学）、前川直也（国際武道大学）、
大島修次（国際武道大学）

本プロジェクトにおいては柔道における競技情報の集計方法および電算化を検討するとともに、競技情報の即時的配信環境を構築することを目的とする。

2015年度は柔道の指導者や審判として活動している共同研究者、そして選手や情報入力担当者などと様々な視点からの検討を重ね、ゲーム分析ソフト「スポーツコード」の柔道用カスタマイズを行った。そして本学の柔道部員に「スポーツコード」活用に関する講習会を複数回実施し、嘉納杯および若潮杯にて実際にシステムのテスト運用を行った。4月には全日本柔道連盟広報委員会にて本プロジェクトの概要説明を実施し、今後連携していくことを確認した。

【キーワード】 柔道、競技情報、即時配信システム

望ましい生活習慣を自ら形成できる児童の育成 —子ども手帳を活用した生活習慣の向上を目指して—

国際武道大学附属スポーツ・科学研究所
いすみ市立千町小学校 中村 功樹

本研究の目的は、小学校3年生児童から6年生児童に対し、自分で管理できる目標設定型HQCシート（子ども手帳）を活用し、目標を適宜見直し、目標達成経験を積み重ねる中で、望ましい生活習慣を自ら形成できる児童の育成を目指すことにある。

対象は小学3年生から6年生児童計44名（男26名、女18名）であり、18週間の目標設定型HQCシート（子ども手帳）調査（2015.7.6–11.8）、および2回の従来型HQCシートによる生活習慣行動実態調査（2015.7.1–7.7、2015.10.26–11.1）を実施し、児童が自ら目標を設定し、その目標達成の満足度を確認することを繰り返すという意識の変化へのアプローチが、実際の生活習慣行動の変化と関連があるのかどうかを明らかにしていくことにある。

児童は18週に渡り目標設定型HQCシート（子ども手帳）を記録してきた結果、前6週と後6週の目標設定に対する生活満足度（4件法）では、前6週の2.84ポイントに対して後6週では3.12ポイントと、生活満足度が有意に上昇していることが分かった（ $t(34) = -4.73, p < .001$ ）。同時に従来型HQCシートによる生活習慣行動実態調査から「朝、一人で起きられたかどうか」について対応ありt検定で検討した結果、有意に増加しており（ $t(53) = -22.152, p < .001$ ）、「家庭での読書」についても有意に増加した（ $t(53) = -19.907, p < .001$ ）。さらに、テレビやゲームの時間については、有意に減少していた（ $t(53) = -2.774, p < .01$ ）。これは、子ども手帳を通した健康に過ごすという意識の高まりと、健康的な生活習慣行動への変化が、同時に生じたことを示すことができた。

【キーワード】 小学生児童 生活習慣